Japanese Association for Religious Studies

sons of different faiths」、「Religious knowledge」である。

宗教間対話を「異なった信仰を持つ人々の間の市民対話」と位置づければその対話は究極的な対立を引き起こすことなく進むのかもしれない。それはいわば「聖」の部分、すなわち宗教的信念については個人的領域に収め「俗」なる市民としての立場で考え、事態に対処することを意味するからである。しかし、そのように厳密に区分して対処することは可能だろうか。「世界平和」をめぐる対話では個別の事態には対処が難しいのは確かである。宗教的信念を持つ者同士が対立しがちであることも確かである。市民として対話をすれば話しやすいのも確かだろう。しかし、対立を恐れず、また対立を回避しようとせず辛抱強く他者と向き合うことが、そしてその姿勢を養うことが宗教間対話の一つの意義でもある。

宗教的生命倫理は可能か？

――エンゲルハートを手掛りに――

村上喜良

生命倫理学の諸問題に於いて、科学と宗教、宗教と宗教とが対立し合っており、宗教と宗教との対立の方が闘争的で根が深いと思われる。この闘争的で根が深い宗教と宗教の対立を如何に回避し、解決することが出来るのだろうか。

エンゲルハートは、この問題の解決に懸命に取り組んだ。彼の解決策は、平和的非宗教的多元的倫理学（peaceable secular pluralist ethics）の構築である。この倫理学は、平和、非宗教的、多元的、理性的個人の四つの要素から成っている。闘争よりは平和に共存することを倫理学の第一目的とすること。理性的な理由付けのない宗教的な教義を普遍化して押し付けないこと。理性的正当化の極限を超える事柄に関しては互いに寛容であること。この倫理学を支える主体は、共同体ではなく、あくまでも理性的決断をする個人であること。このような平和的非宗教的多元的倫理学を基に、現在の生命倫理学の第一原理である自律の尊重が生まれてきたと推測される。そして、この自律尊重原理は、目下のところ、世界的に受け入れられている。しかし、問題はないのだろうか。

平和的非宗教的多元的倫理学は、理性的個人に倫理的判断の主体を制限する以上、宗教的信条相互の個人的次元での闘争を回避出来るかもしれないが、信仰共同体相互の闘争を回避できるものではないだろう。また、人間存在そのものに関わるような教義上の形而上学的な闘争を回避することは出来ないだろう。

そもそもエンゲルハートの提出した宗教間闘争の解消策は、生命倫理学の諸問題の解決を脱宗教化しただけである。これでは、信仰する者に、生命倫理学の諸問題の解決に当たって信仰的に考えることを極力押さえるように要請している様なものであり、誇張して言えば、生命倫理学の問題解決に於いては信仰を捨てろと言っている様なものである。むしろ生命倫理学の問題解決に於いては、脱宗教化的思考ではなく根源的な宗教化的

NII-Electronic Library Service

Japanese Association for Religious Studies

思考が必要であると推測される。そこで、宗教の成立する処を現象学的に分析してみる。

私は他者に媒介されることによって存在する。他者とは、私以外の人間、動物、自然である。私と他者とは相互に依存している。私は動物に依存しているが、動物は私に依存していない。それでも動物は人間を気遣っている。私は自然に依存しているが、自然は私に依存せず、しかも人間に無関心である。これらの存在の関係性を根底的に支えているのが、背後に回り込むことの出来ない超越的関係性の場である。それ故、この超越的場が宗教の源泉である。具体的には、これらの存在者を統べている生命そのもの、それも実体化した意味ではなく、生命活動そのもの、生きていると言う働きそのものである。すべての存在する者は、この生きていると言う働きそのものの具象化なのではないだろうか。そして、生きていると言う働きそのものに、最も近く具象化されたものが神々であり、次に自然と動物達であり、人間が最も遠い存在なのかもしれない。従って、人間の自由は自己の欲求を無限に拡大し実現することの為にあるのではなく、生命活動そのものと自然や生き物たちの調和に参与する為にあるのではないだろうか。

宗教や信仰が生じてくる処は、生命活動そのものである。それ故、生命倫理学の諸問題の解決は、以上の意味で宗教的でなければならないのは必定である。斯くして、始めに立てられた問いに、今や解答することが出来る。宗教的生命倫理学は可能である。否、それ以上に、生命倫理学は宗教的であるべきなのである。

日本の大学における「生と死の教育」の可能性

冲永隆子

本発表では、「生命（いのち）の価値」に視点を向ける「生と死の教育」（死生観を問う教育）の展望を述べる。いのちとは何かを問うこと自体が宗教(学)の本質であると考え、宗教学の体系に生死の問題をあてはめるのではなく、生死という事柄そのものを主題的に考察する立場から、「生とは何か？」「死とは何か？」という問いを、近年混迷を深める先端医療技術（生命操作）の倫理的課題に焦点をあてて今一度考えてみたい。

ホアン・マシアは「倫理における二つの問い」を、①「何をなすべきか」という当面の課題と、②「何のために生きるか」という生き方の根本問題への問いかけとしている。これまでのバイオエシックス的アプローチでは、日夜進歩しつづける医学と医療技術を後追いする形でそれらの是非や臨床利用に求められるガイドラインや指針をめぐり、人間とその生命に対する思想や哲学が根本的に再考される緊急課題に視点が向けられてきた。バイオエシックス教育の主たる課題は、そうした①「何をなすべきか」という判断基準・倫理原則を暫定的に導き出すよう努めることではあるが、各人の生き方の根本問題である②「何のために生きるのか」という抽象的で結果の見えにくい自らの死生観を問う課題に対しては後回しにされがちである。そ

NII-Electronic Library Service